

との関係把握に有効であり、さらに超音波診断、シンチグラフィ、C・T検査を併用すれば、より精度の高い診断が可能と思われた。

演題5. 当講座におけるポリクリ実習時の咬合の診査と昭和57年度の分析について

○熊谷 敦史, 長田 亮一, 奥山 祥充
岡田 喜明, 上野 和之

岩手医科大学歯学部歯科保存学第二講座

昭和57年度歯学部5年生を被験者とし、22歳から34歳までの男性71名、女性19名の計90名について、開口および閉口運動、顎関節の雑音・疼痛、安静位空隙、頬圧痕・舌圧痕、側方運動に関する分析を行った。

開口運動時に顎の変位が認められたものが男性で26.8%、女性で38.9%、閉口運動時に顎の変位が認められたものが男性で23.9%、女性で38.9%であった。最大開口位は男性が47.7mm、女性が43.0mmで有意差が認められたが、関節頭回転軸開口径は男女とも17.9mmであった。安静位空隙は男性が1.53mm、女性が1.57mmで有意差はなかった。頬圧痕は男性で70.4%、女性で78.9%に認められ、舌圧痕は男性で49.3%、女性で55.6%に認められた。頬圧痕・舌圧痕はclenchingの場合に見られることが多いとされているが、一般にもかなり高頻度で認められた。顎関節の雑音は男性で36.6%、女性で31.6%に認められ、男性の2例は疼痛を伴っていた。顎関節に雑音・疼痛があったものでは、開口および閉口運動時に顎の偏位が認められたものが著しく多かった。関節頭回転軸開口位および安静位空隙は顎関節の雑音・疼痛の有無による有意差はなかったが、最大開口位では有意差が認められた。側方運動における咬合関係では、作業側でGroup functioned occlusionに近い関係のものが約半数、Mutually protected occlusionに近い関係のものが約3割認められ、また、平衡側での負担過重は約25%認められた(特に最後臼歯で多く見られた)が、男女間および顎関節の雑音・疼痛の有無による差異は今回の調査では明らかにすることはできなかった。また、今回の調査では、咬合異常に伴ういわゆる外傷性咬合を有している例は数多く認められたが、歯周炎を呈している例は殆んどなく、外傷性咬合の歯周病変促進因子としての役割はかなり限定された状態で演じられるということを示唆しているように思われた。

演題6. 補綴臨床における Forced Eruption の応用
——1症例を中心として——

○伊藤 邦彦, 塩山 司, 石川 成美
石橋 寛二, 中野 廣一*, 亀谷 哲也*
石川 富士朗*, 石毛 清雄**

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座
岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座*
福島県福島市大森歯科クリニック**

歯肉縁下深部に達する齶蝕や歯根破折などのように、保存と抜歯の境界に位置する症例では、その判定に苦慮することが多い。これらの歯を保存する方法として、歯槽骨削除後に、歯冠修復を行うことも考えられるが、その結果として歯冠歯根比の悪化、付着歯肉の幅の減少、歯肉縁の根尖側への移動など、支台歯をとりまく環境の悪化が予想される。そのため、演者らは天然歯を可能な限り保存するという立場を基本に、Forced Eruptionを応用して環境の改善をはかることを試みている。

今回、外傷により歯槽骨縁下約2mmの位置で破折した上顎左側中切歯に Forced Eruption を応用することとし、シジン暫間冠を装着後、矯正処置を行った。16週で動的処置を終了し、その後16週保定した結果、約2mmの移動が得られた。移動に伴い歯槽骨頂縁への骨添加が認められたため、冠縁を歯槽骨縁上に設定し、さらに歯肉溝底部と歯槽骨頂縁との距離を確保する目的で、歯槽骨削除を行った。陶材焼付鑄造冠装着後2年9ヶ月を経過した現在、機能的にもX線的にも良好な結果が得られている。

このように Forced Eruption の応用は他に比較し、支台歯をとりまく環境の保持、改善という面で多くの利点を有するが、一方で長期にわたる矯正装置装着中の審美障害や異和感、Plaque control、歯槽骨削除等の外科処置の必要性など、いくつかの問題点も含まれている。また、Optimal forceをはじめ、骨添加や歯根吸収の起こる状況等に関しては、今後の研究課題として残されている。今後さらに長期的観察を続けながら、適応症の選択等も含め検討していく所存である。

演題7. 沢内村総合成人病検診における歯科予防活動

○横沢 茂樹*, 中里 滋樹, 谷藤 全功

岩手県沢内村立沢内病院歯科
岩手県盛岡市県立中央病院歯科口腔外科*

沢内村では、昭和52年度より35~59才を対象として総合成人病検診を行っており、その一貫として歯科部門では、検診、パノラマX線撮影、衛生教育、希望者に対する歯石除去を行っている。今回、我々はその活動の概要と過去6年間の40才台の口腔状況について調査したので、その結果を報告した。1人平均う歯数(D+F)は、男性5.8本、女性9.0本で、女性が高い値を示した。1人平均現在歯数は、男性24.9本、女性19.9本で、男性が高い値を示した。健全歯数、処置歯数、未処置歯数は、男性で、それぞれ19本、2.6本、3.3本、女性は、11.0本、6.0本、3.0本の割合で、女性における処置歯数が、特に高い値を示した。1人平均喪失歯数は、男性4.6本、女性8.6本で、女性が高い値を示した。喪失歯所有者率も同様に女性が高い値を示した。喪失歯所有者の補綴状況は完3者、一部完3者、未3者の割合が、男性ではそれぞれ30.4%、31.7%、37.8%、女性では39.9%、41.0%、19.3%で、完3者、一部完3者は女性に多く、未3者は男性に多い。1人平均根尖部病変歯数では、男性0.58本、女性1.04本で女性が多い。1歯あたり歯槽骨吸収程度は、男性1.63度、女性1.71度であった。今回の調査では、女性における早期喪失、男性における補綴状況の低さが、目についた。又、過去6年間を通して、女性の補綴状況にやや改善が認められたものの、その他の口腔内状態は、特に改善されておらず、成人における歯科治療、予防の困難さを痛感した。しかしながら、この成人病検診の中での歯科活動を通じて、住民の口腔衛生に対する関心、意識は、高まってきており、統計的には短期間に改善されるとは思われないが、将来においては、この活動が歯科疾患の早期発見、早期治療に結びつくものと思われる。我々は、今後も、長期的展望に立ち、現在の成人歯科予防活動を継続し、検討していきながら、成人歯科治療、及び予防に、積極的に取り組んでいきたいと思う。

演題8. 衣川村における学童齲蝕罹患についての比較検討

○佐々木 勝 忠、桜 庭 敬 子

岩手県衣川村国保診療所歯科

岩手県衣川村は、昭和49年より衣川村国保診療所に歯科の設置をみたが、それ以前は無歯科医村であり、学童の口腔状態が悪いため、昭和47年より昭和54年まで東北大学歯学部予防歯科学教室による「無歯科医地区学童を対象とした保健計画」が実施された。その概要は口腔衛生学会雑誌第28巻第2号に高木氏らの論文として記載されている。

今回、私達は最近の齲蝕予防活動の評価を目的に、昭和56、57、58年の衣川村学童の歯科検診結果と、歯痛経験調査結果について、高木氏の論文資料と比較検討した。

結果、衣川村学童の口腔状態を昭和47、52、58年と経年的に比較すれば、全学年のDMF者率は、89.9%、79.0%、57.5%と減少を示し、とくに低学年での減少が著明であった。DMFT指数は、3.55、2.99、1.52と同様に減少を示した。D歯率は、85.9%、41.5%、25.0%、M歯率、5.5%、1.9%、0.7%と減少し、逆にF歯率は、8.7%、56.8%、74.8%と著しく増加した。

昭和47年の衣川村学童の口腔状態は、厚生省歯科疾患実態調査による昭和50、56年の全国平均のDMF者率、DMFT指数を大きく上まわっていたものの、昭和58年では全国平均より低下を示していた。

歯痛経験のアンケート調査では、今痛む歯がある、今は痛くないがときどき痛むと答えたものの割合が、昭和47年43.0%から52年22.8%と減少したものの、58年では19.9%とあまり減少を示さなかった。昭和58年の歯痛を訴える学年別割合では低学年の割合が多かった。また学校で歯痛を訴えたり、歯痛のために学校を休んだ経験をもつものの割合は、昭和47年より経年的に減少したが、昭和58年では増加を示した。

結論考察、多方面からの齲蝕予防のアプローチにより本村学童の齲蝕は著しい減少をみた。しかしながら齲蝕減少にもかかわらず、歯痛を訴えるものの減少が伴わない。歯痛は乳歯に起因すると考えられる。今後、低年齢児の齲蝕予防に努力する必要がある。

演題9. 小児歯科外来の初診患者における実態調査

○小野 玲 子、八重畑 雅 子、野 坂 久 美 子
甘 利 英 一

岩手医科大学歯学部小児歯科学講座

この数年、小児歯科外来を訪れる患児は、色々な点で